

日胆の中の全道展 地区別座談会(その1)

出席者 熊谷善正(室蘭) 大友一夫(苫小牧)
 伏木田光夫(浦河) 福井正治(穂別)
 司会 遠藤末満(苫小牧)

遠藤 室蘭苫小牧両市を含めての日胆地方も、全道展出品者は多い。始めに地元展との関係からいこう。

熊谷 室蘭には、今年で43年という歴史をもつ室蘭美術協会があり、会員数十名で、その中核は、全道展、道展の出品者で占められ、会の意識を離れて仲よく当地区美術活動のために努力しています。31年に全道展室蘭支部が設立され、移動展も数回開催して、大いに刺激を呼んだものですが、それまで会場に当てていた場所が、使用不能になり、中止の形になりましたが、昨年文化センターに恰好の展示室が出来たので、地元作家は水を得た魚のように張切って大作を持ちこんでいますよ。

大友 苫小牧地方の美術文化発展の母体になっているのは、苫小牧美術協会で、会員30名、今年43回展を開きます。その他、若い人達の美術活動が盛んで、王子美術部、全道展グループ、道展グループ、沼の端に水曜会などがあります。

遠藤 そのグループの中では、王子美術部が終戦後、ずっと週1回のデッサン会を続けて居り、全道展の移動展を呼んだこともあるよ。

伏木田 浦河の場合も、美術協会があって、毎年30人位の出品者がいます。静内などもこういう協会が動いているわけです。類似に山口惣市君(会友)がいるので、もっと芽が出てくるかも知れません。その他浦河には、日高美術研究会と言うのがあって、デッサンや合評会、展覧会など活発でしたが、昨年解散してしまいました。アマチュアが4年も5年も1つのグループを盛り上げていくのは地方ではなかなか難しいことですね。

福井 胆振地区の主な町村では、一応、美術協会的な団体があるらしいが、趣味的、同好会的な集まりにしか過ぎないようです。その中で追分美術協会が啓蒙的に動いている様ですが、室蘭以西の作家は、大

なり小なり苫小牧美協に属したり、その影響を受けています。私の住む穂別は僻地の僻地ですが、16年前、当時苫小牧の文化団体「蜂の巣会」と苫美協が合流し、総勢20人余りが泊り込みで写生会、歌会、絵画展を開き、山村に美術旋風を巻き起したわけ。これらの影響を受けた者が、今やっと、芸術のいろいろな面で芽を出そうとしています。苫美協の恩恵たるや大なるものがあります。



遠藤 いや、ありがとう。じゃ今度は、それらの団体の中で全道展出品者の活躍振りを話してもらいましょうか。

熊谷 全道展室蘭支部長、そして室蘭美術協会の会長をしているのが高野次郎氏(会友)で、会の運営に当るものは全道展の会員・会友常連出品者といったところですが、この4、5年新人がのび悩みの状態です。

遠藤 室蘭は、新人のび悩みというけれど、むしろ、先輩達の伸びっぷりに新人がついていけないということでしょう。渡辺さんが東京へ出たそうだが、その他の諸君の動勢を。

熊谷 当市美術活動のバックボーンとして活躍していた真利さんだけに惜しくもまた淋しい限りでした。高野さんは、3月に渡欧、現在パリで勉強中です。

遠藤 あなたが、二科のローマ賞であちらにいったのは1月でしたね。

熊谷 ええ、3ヶ月間イタリア政府招へいで欧洲遊学してきました。ファイトを燃やしています。それから昨年石塚潔さんが二紀会同人に推され、富樫日出男さんが一線美術で受賞、西村徳一さんが国展で力作発表、その他太田さん、浅山さん、諏訪さんなど内なる追究に炎を燃やしています。



遠藤 力のある作家がいることは大きな刺激ですね。

大友 苦小牧美術協会は、事務局長に鹿毛正之(会友)さん、その他鈴木善公さん(二紀に出品)、原田省吾、清野恒夫、多田襄二、酒井正勝、池本良三(国展に出品)、片桐勉、中橋靖彦のみなさんが中核として活動しています。全道展会友の能登正智さん、浅野武彦さんも居り、層の厚さがあります。



伏木田 全道展の出品者については頭うちですね。静内の岩淵氏などいい作品を発表していたのですが、連続二、三度落とされると、たいがいいやになるようですよ。なんせ立派な大人が絵を描いたばかりにガンガンやられてしまうのですからね。浦河で二人ダウンです。あの入選の線ね、なかなかつらい線らしいですよ。

遠藤 勝負の世界はきびしいね。このきびしいのが全道展の魅力にもなっているんだが……。

伏木田 だから、今のところ出品者のかなりの力を持ったセミプロ作家が多いようです。地方ではみんな指導的立場のようです。山口惣市氏や藤枝勢一氏は、教職の場で、全日高的指導力を持っているようです。浦河にこのごろ来た松本勝君は、札幌で個展を開くといっていますから楽しみにしています。

福井 胆振地区の出品者は増えている。去年知事賞の角田嘉枝(穂別)は千歳に転出したが、常連の小野司が洞爺から穂別に、札幌、室蘭で個展を盛んに開いている工藤善蔵(穂別)や、有珠に会友の池田正之助、その他、早来、遠浅から彫刻を出品している佐藤公毅や中尾孝典等がいます。

遠藤 今度は、全道展の中でも、日胆の作家はみんな異質の作家といわれたり、強烈な作家が多いと言われるんだけど、何がそうさせるのか、それぞれ地区の立場からどうぞ。

熊谷 室蘭地区の出品者個々の作品を見ると、極めて自由な発言をし、バラエティーに富んでいるように思います。労働者の街で呼吸している作家という印象のかげりが見られないのは面白いことです。

これは大きく北海道そして開道百年を迎えたといっても、美術の歴史を振り返ってもそう長いとは言えない。従って伝統というものがない。室蘭地区は数年前までは文化不毛の地だなどと言われたほどに、そのようなものが稀薄であると



いったところから、かえって作家個々が自由な場で活動出来るわけで、このことは一流一派にとらわれない新しい美の価値への創造へと指向する全道展が、そのまま地区出品者を刺激していると見ています。

福井 ぼくは、発想が問題と思っています。作家は当然自分が今いる場を確かめ、自然、それにもとづく表現の希求が制作の糸口となります。都市にあっては流行を追ったり、単なる表面上の技術面だけの操作にとどまっている人達が多いので、我々の表現が良いにつけ、悪しきにつけ、目立つといわれれば目立つのでしょうか、そういった事に甘んじてはいけないと、いつも考えています。

大友 絵とはつきつめてみると、「自分独自の絵画スタイルを作り上げること」であると思います。苦小牧の仲間も、全道展で育ち、それぞれに苦労して自分の道を進んでいると考えます。

遠藤 日高は、室蘭とも苦小牧とも違うものがあるね。

伏木田 日高在住および出身の作家達——花谷時子の新鮮な感覚、あのとろけるような甘美なエロチジスム——佐藤哲夫(今、札幌)のすごく抒情的な狐が走ったりしている絵——大友一夫(今、苦小牧)のねぼってねぼってねぼりぬく哲人みみたいな制作、その他、田村一良、久保田実、藤枝勢一、高橋徳二、清水昌光、松本勝、山口惣市——の仕事を見ると、詩情のある牧歌性。夢想的素質とリアリズム、現実性の大きな二つの素質をみることが出来るが、泥くさを混ぜたところは、まさに風土性からくるものかと考えられます。しかし風土性をせまく考えると、足をすくわれて大した仕事にならないのは、風土性の難しさだと思いますね。現代というこの不可解なデモンに立ち向かう時、立っている場所が初めて重要な意味を持つてくるのだと思います。



熊谷善正

遠藤 風土性が出たところで、今後はどうです。地方にいることのプラス・マイナスを論じて下さい。



福井 「地方コンプレックスを壊せ」と針生一郎が言っているが(美術手帖4月号)中央どころか、地方にいることにむしろ自信と誇りをもっています。東京と北海道が一時間に短縮されている現在、私達は国際的な美術の動向に目を配りながら、自分の住む地方は東京にはないものをつくる態度が必要だと思います。しかし、「権力や資本も無縁で、社会的地位さえも持たぬ者が、どのようにして新しい、コミュニケーションの通路を切り開くか」(針生)という大きな課題を控えています。出品した作品は全部物置に入れられ、作品は飾る場をもたず、絵具代を僅かの収入の中からしか捻出出来ない現実と、未だに根太く残存する地方の封建性と、美術に対する不理解と常に対決しながら、制作を継続的に押し進めていくには、余程の忍耐と勇気が必要だということを20年間の制作の中で痛烈に感じている次第です。

遠藤 わかる、わかる。

伏木田 ぼくは、はっきりとマイナスだと思う。セミプロからプロに転向する才能ある作家が出現したとしても、現在の地方というのは生存を教してくれない。ただ制作という面から考えると、都会で制作するのは馬鹿みたいことだ。自分をじっくりとみつめられるのは、静かな方が良くにきまっている。ただしこれは巨人でないと、3年でぼけてしまう。地方に住んでみると、都会とは別な無気力感に悩まされるもんだ。

大友 どこに住んで、どんな環境にいても視点を広く高くもっていれば何所でも同じなんだろうけれど……。

熊谷 別の角度から……。地方にいと作家同志の交流による人間的なふれあいという面で欠けるきらいはないか。お互いに職場を持ち、制作に寸暇を惜しむことに禍され、自分の殻にとじこもる結果になりかねないよ。

伏木田 鉄人アトムみたいな作家は、地方で大作家になれるが、まあ僕達はうちよろしながら、プラスマイナスゼロにもっていったところから始めるのか地方作家じゃなかろうか。

遠藤 では、最後に、全道展を魅力あるものにするために考えたいことを……。

熊谷 全道展は魅力があると思っていることは自分自身出品以来10余年を経て現在も変わらないし、自負しているところでもあるが、その為には常にいつもいいものを描きたいことのみ。地区への移動展は現在困難なことから、せめて地区出品者によるものだけでも大いに盛りあげて市民にアピールすることが、即 本展につながる問題と思うがね。

福井 胆振だったら胆振の地方在住の全道展出品者だけの、去年は帯広で開かれていたグループ展か、少なくとも年2回は開かれる程の制作態度が欲しいな。また、年1回の全道展でなく、前年度の受賞者、会友、会員の同人展的なものもよくはないか。

大友 本展は会員1点出品という制限なので、別に会員展を行なっては……。 (札幌会員には御苦労さんですが)

伏木田 絵がお上手な人達を、和気あいあいと集めたのでは、ぶっつぶれた方がいいと思うがね。

遠藤 きびしいところが出たところで、ザ・エンド。どうもありがとう。



遠藤 未満